

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2026年）

1月1日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 6章1～13  
「イエス様の伝道方法」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU061.mp3>

イエス様はガリラヤ伝道の初めにも故郷のナザレに行かれました。その時人々は受け入れませんでした（ルカ 4：16～30）。しかし、再び故郷のナザレにお出でになって会堂で教えられました。すると、そこに集まってきた人々は、幼い時からよく知っている大工の息子に、どうしてこんなに知恵や力あるわざが出来るのかを驚き怪しみ、イエス様の教えを聞いても信じませんでした。しかしイエス様は、咄いたり嘆いたりせず、「付近の村々を巡りあるいて教えられた」（6節）のです。どんなことがあっても、なんとしてでも伝道していく、これがイエス様の伝道方法でした。そしてバーネット先生から引き継がれた、私たち福音伝道教団の伝道方法です。この魂に対する愛のゆえに、イエス様は12弟子たちを伝道旅行に遣わされたのです。

1月2日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 6章14～29  
「バプテスマのヨハネの死」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU062.mp3>

12人、6組の伝道チームが各地でその奉仕を始め、大きな成果をあげるようになると、彼らの先生であるイエス様に注目が集められた。聖書注解者ベンゲルは「霊的なニュースが一番遅く伝わる宮殿の中まで、イエスの名前は伝わっていた」と言っている。人々は無責任に、イエス様のことをエリヤの再来だとか、素晴らしい預言者などと言っている。当時のメシヤ待望の現れである。しかし、イエス様の噂を聞いて動揺する者もいた。ガリラヤの国主ヘロデである。彼はバプテスマのヨハネを殺害した男であり、このことで良心の責めを感じていたからである。そのためイエス様のことを聞いて不安になり、「私が首をきったあのヨハネがよみがえったのだ」（16節）と言っていた。人はたとい王であっても罪の前には惨めな存在なのである。

1月3日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 6章30～44  
「五つのパンと二匹の魚」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU063.mp3>

イエス様も弟子たちも忙しくしていて食事をする暇もないほどでした。イエス様は、人を避けて寂しい所でしばらく休みなさい、と言ってくださいました。彼らが出かけると、人々はそれを見つけて先回りをしました。飼う者のない羊のような群衆をイエス様はあわれみいろいろ教えてくださいました。遅くなったので弟子たちは食事のために群衆を解散させようとしたのですが、イエス様は五つのパンと二匹の魚を祝福して、弟子たちに配らせました。男の人だけでも五千人が満腹し、しかも残りは十二のかごにいっぱいになりました。弟子たち

はイエス様の働きに加えていただいて、イエス様のすばらしさと人々の喜びに共に与らせていただいたのでした。

1月4日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 6章45～56  
「逆風と荒波」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU064.mp3>

イエス様は弟子たちを舟に乗り込ませてベツサイダに行かせました。ご自分は群衆を解散させ、お一人で祈るために山に向かいました。夕方頃、舟はガリラヤ湖の真ん中に出ていて、逆風に悩まされ弟子たちは漕ぎあぐねていました。夜明け前にイエス様は湖の上を歩いて近づかれましたが、弟子たちは幽霊だと思って叫び声をあげたとあります。弟子たちの中にはガリラヤ湖で漁師をしていた人たちもいました。彼らが一晩中翻弄されたのですから、大変な逆風と荒波だったと思われます。また漁師だった人々が大声を上げて恐れたほど、彼らは心底恐れと驚きに圧倒されたのだと、想像します。イエス様は舟に乗り込んでこの逆風を静めてくださいました。

1月5日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 7章1～13  
「人の言い伝えとイエス様の教え」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU071.mp3>

各々の地方で、様々な言い伝えや慣例がある。それらはもともと意味がないにもかかわらず、その形式だけを行うように強制される事が多い。エルサレムにいる権力者たちは、ガリラヤにおけるイエス様の働きを何とかして芽のうちに摘み取ってしまいたいと、攻撃の材料を鵜の目鷹の目で捜していた。だから彼らは、弟子たちのうちの何人かが、不浄の手でパンを食べていたのを見て、「昔の人の言い伝えに歩まない」（5節）とケチをつけた。しかし、イエス様はこの7章で、鋭い適切な表現をもって、人の言い伝えと神の戒めを解き明かし、神の真理と人間の真実について教えられた。私たちの周りにも、何だかわからない伝統等があって、それに縛られてしまう事があるから気をつけよう。

1月6日 今日を通読箇所 マルコによる福音書 7章14～23  
「心から出るものが人をけがす」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU072.mp3>

イエス様は、言い伝えなどが導く欺瞞について律法の専門家たちをするどく指摘した。その後イエス様は、「すべて外から人の中にはいって、人をけがしうるものはない」（15節）と言われた。レビ記11章には、けがれた食物のリストが掲げられている。シリアの王エピファネスは、ユダヤ人を根絶やしにしようと豚肉を彼らに食べさせる策略をたてた。すると予想通り、彼らは汚れたものと定められている豚肉を決して食わず死を選んだ事がある。だからイエス様のこの言葉は、彼らを激しく怒らせた。しかしイエス様は人がその腹の中に入れるものは人を汚さないといったばかりではなく、さらに「人から出てくるもの、それが人をけがすのである」（20節）と言われた。そこで心の中から出て人をけがすもの12種類を列举された。

1月7日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 7章24～37  
「ツロ、シドン、デカポリス」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU073.mp3>

イエス様はガリラヤ湖の北西の異教の地、ツロ、シドンに向かいました。その後、ガリラヤ湖の東南のデカポリスを通して再びガリラヤ湖畔にお戻りになりました。ツロの婦人について「女よ、あなたの信仰は見あげたものである」とマタイ福音書15章でお褒めになっていらっしゃいます。シドンでは、かつて神様はエリヤを用いて、かめの粉は尽きず、びんの油は絶えないという奇跡によって、シドンのザレパテに住む親子を飢饉の間、養っていただきました。また、デカポリスはギリシャ語を話す人々の移民の町で、ギリシャ文化の中心地でした。このように、イエス様はユダヤだけでなく異邦の民が住む町々村々をも訪れてくださったのでした。ガリラヤに戻ったイエス様は、耳の不自由な人を癒してくださり、彼の耳は開け、舌のもつれが解かれたのです。

1月8日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 8章1～10  
「七つのパンと小さい魚」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU081.mp3>

男の人だけで五千人の人々を養った奇跡に続いて、ここには男の人だけで四千人の人々を養った奇跡が記されています。大勢の群衆は三日間イエス様と一緒にいて、お話を聞きました。この近隣でなく遠くから来ている人々もいました。手元にあったのは七つのパンと小さい魚が少し。イエス様はこれを祝福して用いていただきました。食べた人々は満腹し、残ったパンくずは七つのかごにいっぱいになりました。ヨハネ福音書のように、人々は、イエス様は飢えを満たす方、と誤って受け止め、イエス様を追いかけるのです。「命のパンである」（ヨハネ6章35節）イエス様に、人々の目が開かれるのは容易ではありません。ダルマヌタの地方とは、この箇所に出てくる地名でガリラヤ湖畔西岸の一地域と考えられるようです。マタイ福音書15章にはマガダンと出ています。

1月9日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 8章11～21  
「二つのパン種を警戒せよ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU082.mp3>

エルサレムからやってきたパリサイ人は敵意に満ちていた。彼らはイエスに、もしあなたが本当にメシヤなら、そのしるしを見せるように要求した。「天からのしるし」は、神から遣わされたメシヤであることを示す証拠のことである。彼らはイエスがメシヤであるという噂が民衆の中に定着することを恐れて、本当にメシヤであるならばその証拠を見せるように詰め寄った。またガリラヤ湖の向こう岸に渡ろうとしていた船の中では、イエス様は弟子たちに「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とを、よくよく警戒せよ」と戒めた。パリサイ人のパン種とは偽善のことで、ヘロデのパン種とは世俗的、肉欲的な快樂主義のことである。そして現在も、キリスト教会が最も警戒しなければならない事は、この二つのパン種ではないだろうか。

1月10日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 8章22～30

「わたしをだれと言うか」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU083.mp3>

ここには二つの記事が記されている。一つは盲人の癒しで、もう一つは、ペテロの信仰告白です。イエス様は、ガリラヤのベツサイダにおいて、ひとりの盲人を癒したばかりではなく、彼の手を取り、村から連れ出し、一対一になって、心と心の出会いを彼に体験させ、彼の心の目をあけてあげました。それからイエス様は、ピリポ・カイザリヤに行く途中、「人々は、わたしをだれと言っているか」と尋ねました。弟子たちは人々が「バプテスマのヨハネ、エリヤ、預言者のひとり」だと言っていると告げました。するとイエス様は「それでは、あなたがたはわたしをだれと言うか」と尋ねました。これは私たち一人一人に対する重大な質問です。ペテロは、聖霊の導きで「あなたこそキリストです」と告白しました。では、あなたは何と応えますか？

1月11日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 8章31～38

「自分の十字架を負って」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU084.mp3>

人々は死刑囚がこれから死刑にされるために、自分がつけられる十字架を背負って刑場に向かう姿を見ました。イエス様は罪のない神のひとり子であるにもかかわらず、同じようにゴルゴタに向かって十字架を負って歩まれました。すべての人の救いのために歩まれた十字架の道は、父なる神様から与えられた、イエス様の最大の使命でした。イエス様のほかに誰がこの使命を果たすことができるのでしょうか。誰も代わることはできません。そしてイエス様が十字架を負って歩み十字架で死んでくださったので、信じる者の救いが完成したのです。私たちはイエス様を信じ、他の人には代われない、神様が与えてくださった生きるべき道を歩むとき「魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」(マタイ 11章 29、30)ということを知るのです。

1月12日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 9章1～13

「栄光の御姿」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU091.mp3>

神の国の力の到来を垣間見た三人の弟子はペテロ、ヤコブ、ヨハネでした。「高い山」とはパレスチナ北部のヘルモン山と推定されるようです。神様はシナイ山でモーセに十戒を刻んだ石の板を与えました。エリヤは旧約時代を代表する預言者です。この二人がイエス様と一緒に語っていたのです。しかし、二人の姿はやがて消え、そこにはイエス様だけがおられました。イエス様は十字架でお死になられますが、栄光に輝く御姿で三日目に復活なさいました。十字架の苦難と死の後に、栄光と勝利の御姿を明らかにしてくださいました。「これはわたしの愛する子である。これに聞け」という御声のとおり、永遠に栄光を受けられる方です。



1月13日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 9章14～29  
「信仰と不信仰の狭間で」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU092.mp3>

山の上で、素晴らしい栄光が示されていた時、麓では不信仰を象徴するような事件が起きていました。山の麓に残った弟子たちのもとに、ある父親が悪霊につかれた息子を連れて来ました。弟子たちは悪霊を追い出してあげて引き受けたようです。彼らは前に全国伝道に派遣された時、奇跡を行った実績があるので、自信を持っていたのです。ところが今、彼らはその力がありませんでした。この噂を聞きつけて、群衆と律法学者とが飛んで来ました。イエス様に対するまたとない攻撃材料が手に入ったからです。こうした中で、悪霊につかれていた息子をどうしても治して欲しいと願った父親の中に、イエス様との会話で、真の信仰が生れていったのです。

1月14日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 9章30～37  
「一ばん偉いのはだれ？」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU093.mp3>

イエス様はカペナウムに向かう途中、弟子たちに2度目の受難と復活の予告をされました。しかし彼らはイエス様の言われたことを悟ることができませんでした。人は誰でも、いくら説教で十字架のお話を聞いても、イエス様を受け入れるまではこの奥義を悟れないのです。弟子たちは、イエス様の受難と死と復活について悟れないばかりか、カペナウムに向かう途中に、「誰が一番偉いか」と論じ合っていたのです。あの素晴らしいヘルモン山での経験と、それと対照的に山の麓でのみじめな失敗がそのきっかけだったのでしょうか。アウグスティヌスは「高慢はすべての罪の本質である」と言いました。しかし、十字架のもとにひざまずいて主を仰ぎ望む者は、高ぶりと失望から救い出されるのです。

1月15日 今日の通読箇所 マルコによる福音書 9章38～50  
「ひきうすと塩」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/41MARU094.mp3>

他の人をつまづかせることが、どんなに大きな罪か、「ひきうす」とは、ロバがひく大きな石臼で、これを首にかけられて海に投げ込まれるほうがはるかによい、と言われるほどです。また、自分をつまづかせるものを取り除いてどんな犠牲を払っても、永遠の命をいただくほうが大切だ、とされています。体の一部である手を、あるいは足を切り捨てるといふ、激しい表現がなされていますが、手を動かし罪を犯させるのは心ですから、たとえ手を切っても根本的な解決にはなりません。しかし、それほど真剣に、心の罪を神様の前に謙遜に素直に認めて、罪をお詫びしキリストの十字架の血によって赦し清めていただくことが大切なのです。塩は食べ物の腐敗を防ぐ作用をします。同様に、清い心と生活を求めて自分自身に厳しく、しかし周りの人には優しく平和に過ごすようにと教えてくださったのです。

1月16日 今日の通読箇所 ヨブ記 17章  
「墓が持っている」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE171.mp3>

ヨブのような場合に、その思いと言葉をしばしば死が横切るのは当然だ。もともと「死を思う」のは、すべての人間に共通のものなのだ。「望むのは私の生き甲斐だった。この頃は若い時分と違って、望めないものを望むのはやめて、望めそうなものを望んでいた。だが今はその望みもすてる」これは死にのぞんだ高見順の詩だが、やがて誰にもその日が来る。

1月17日 今日の通読箇所 ヨブ記 18章1～15  
「悪しき者の運命」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE181.mp3>

ヨブの言葉はビルダデにとっては「神から罰を受けるのは罪人だ」という、根本真理がよくわかっていない言葉のように受け取られる。そこでこの大前提、大原則を認めさせるところから、議論を立て直そうというわけだ。これはヨブとは噛みあわない議論だったが、我々などは案外、この知れ切った大原則について気持ちも生活もズレ易いので、今くり返し、この章を学ぶ必要があると思う。

1月18日 今日の通読箇所 ヨブ記 19章9～29  
「我をあがなう者は生く」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE191.mp3>

ヨブは友達や世人の評価でなく、神による永遠の評価、裁きに望みを置く。ヨブの生涯とその苦難、またヨブの信仰の言葉、悲しい言葉、疑問の言葉が、すべて碑に刻まれて記念されるようにヨブは求めている。終末の日に神によってすべては明らかにされ、ヨブにも納得がゆくだろう。そして「神と知己」であることが、その時のヨブの喜び、栄光となるだろうと。

1月19日 今日の通読箇所 ヨブ記 20章1～17  
「腹の中の毒」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE201.mp3>

からし蓮根はおいしいものだが、中に人の神経を犯すボツリヌス菌、などが入っていてはたまらない。「たとい悪は口に甘く、口の中に含んでも、彼の腹の中で変り、毒蛇の毒となる」とあるように、しばしば罪もまたおいしいので、ついすっかり楽しんでいると、その中にしかけられた悪魔の毒は、我々を苦しめ台なしにして、最後には滅亡に追いやってしまうのだ。その味に魅せられないさきに、罪を避けるのが、まず賢明というものだろう。

1月20日 今日の通読箇所 ヨブ記 20章18～29  
「がき」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE202.mp3>

仏教で教える地獄の中に「がき道」という場所がある。ここに落とされた死者は、いつも飢えに苦しんでいる。ところがここには食物がないわけではない。いくら食べても飢えに苦しむのがこの死者の問題なのだ。「彼の慾張りには足る

ことを知らぬゆえ、その楽しみは何物をも救うことができない」とここに言われているように、死者でなくても、繁栄とぜいたくの日本にも、場合によっては「がき道」が出現するのである。

1月21日 今日の通読箇所 ヨブ記 21章6～26  
「悪人の繁栄」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB211.mp3>

ヨブの場合のように、神様は、信じ従う者に対して、時々には苦しいつらい試練を与える。そういう時の寂しい心境には、神様を信じない気楽な罪人の方が、むしろ安逸と繁栄を楽しんでいるように見える。しかし「神のひき臼はゆっくりまわっているようでも、必ず中のものを砕き、神の網の目は大きいようでも最後にはすべての魚を捕える」のは真理だ。我々は試みの日に出会っても、感傷的な不信仰に落ち入らないようにしよう。

1月22日 今日の通読箇所 ヨブ記 22章1～20  
「弱い者いじめ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB221.mp3>

人は自分が思いこんだことを、なかなか改めることができない。だから話というものは食い違いが多く、時間をかけてもなかなか噛み合わないのだ。エリパズは「正しい者が神の祝福を受け、罪人が神の罰を受ける。ヨブは神様から罰を受けているのだから罪人だ」という単純な三段論法から一步も動けない。勢いのおもむくところ、観念的にヨブを罪人あつかいにする。この章のエリパズの言葉など特にひどく、これではまるで弱い者いじめだ。

1月23日 今日の通読箇所 ヨブ記 22章21～30  
「神と和らげ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB222.mp3>

「あなたは神と和らいで平安を得るがよい。そうすれば幸福があなたに来るでしょう」とは、たとえエリパズの口から出た言葉であっても真理だ。すべての人はこの真理に従うならば幸福を経験するだろう。それには「全能者に立ち返っておのれを低くし、あなたの天幕（家庭、あるいは生活）から不義を除き去る」ことが必要だ。この章は人が救われて神の祝福を経験するまでになすべき、入信のプロセスを、たくみに書き出している。

1月24日 今日の通読箇所 ヨブ記 23章1～17  
「彼を尋ねて会いたい」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB231.mp3>

ヨブの場合における神の態度を、ある神学者は「神の沈黙」と表現した。ヨブが祈ってもその苦難から解放されることなく、ヨブが叫んでも、その苦難の意味について、神からの説明はない。神様はヨブの祈りにも、ヨブの友人たちのひどいヨブ批判にも、ただ沈黙して放置し給うかのように見える。この中でヨブの「どうか彼を尋ねてどこで会えるかを知り、そのみ座に至れるように」という、その祈りは悲痛だ。

1月25日 今日的通読箇所 ヨブ記 24章1～20

「らちの明かない裁判」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB241.mp3>

「権力者の無法、裁判のひきのぼし」と言って、ハムレットさえ裁判の遅延を、生存の苦痛のひとつに数えている。ヨブは正しい者が苦しみ、悪い者が繁栄する、いわゆる「悪しき世」に対して「神の裁きの日は定めてないのか?」と、神の裁判の遅延をもどかしがっている様子である。しかし神は言い給う「もうしばらくすれば（主が）お見えになる。遅くなることはない（ヘブル10章37節）」と。それが「主の日」すなわちクリスチャンの待ち兼ねている「神の裁きの日」なのだ

1月26日 今日的通読箇所 ヨブ記 25章1～6

「天の軍勢」

「天の軍勢」とは天使の軍勢の意味に用いられることもあるが、ここでは宇宙、

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB251.mp3>

天体のことである。神の造り治め給う天体は数えつくすことができない。太陽、月、星などは誰ひとりその輝きを仰がない者はなく、その光に浴さない者もない。しかしすべての作者である神の目には、宇宙が格別偉大とも、太陽が特に輝かしいとも、また月が清明ともうつらないだろう。ましてうじ虫のように小さく不潔な人間が、どうして神の前に清く価値あるものと言えようか。

1月27日 今日的通読箇所 ヨブ記 26章1～14

「神の絶対性」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB261.mp3>

ヨブと三人の友人の議論はまだまだつづく。すべて神様にかかわる議論だが、それぞれの研究、知議、体験を通して知り得た神について、はてしなく議論がつづくのを見れば、いずれもりっぱな神学者なのだ。ここでヨブは言う「我々の知るところは、神にゆく道の端にすぎず、その道はまだ遠く長い。我々が神について聞くとしても、それはほんの神のささやきにすぎない。神の力のとどろきということになれば、誰がそれを知り得よう」と。いまヨブは「わが魂は黙してただ神を持つ」という心境なのだろう。

1月28日 今日的通読箇所 ヨブ記 27章1～23

「むなしさ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB271.mp3>

「むなしさ」「はかなさ」というものは、神にそむいて生活している人間の、基本的な運命である。結局、最後の死と滅亡をまぬかれることができないからだ。「銀をちりのように積んでも」最後には他人の物となる。りっぱな家を建てても「くもの巣」のようにはかない。まるで、収獲がすむと簡単にとりこわす畑の「番人小屋」のようだと。エジプトにある、ボロボロ角の欠けた、ばかでないピラミッドや王の墓も、盗賊に荒らされてほこりだらけで、また同じ運命を示している。



1月29日 今日の通読箇所 ヨブ記 28章1～14  
「ゴールドラッシュ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE281.mp3>

昔でも金や銀の鉱脈を掘り当てようと、一獲千金を夢見て危険を恐れない、いわゆる山師がいたものとみえる。ヨブ記のこの部分は昔の鉱山で鉱石を発掘する作業の、めずらしい描写だ。しかし人生において、金銀よりもっと大切な、真実の知恵について、そんなに熱心に捜し求める者はなかなかいない。おまけにそれは金銀よりもっと見付けにくい。ただ神様の恵みによってのみ、人はそれを得ることができるのだ。真実の知恵とは何か、それは最後の[28 節]に書いてある。

1月30日 今日の通読箇所 ヨブ記 28章12～28  
「知恵と悟り」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE282.mp3>

人間は金銀や宝石を一生懸命に捜すが、本当の知恵を求める人、それを見つける人は少ない。ただ神様だけが私たちを知恵に導き知恵を与えて下さるのだ。その本当の知恵について「主を恐れることは知恵であり悪を離れることは悟りである」[28 節]と記されている。反対に「愚かな者は心の内に『神なし』と言い、その心は腐れている」(詩篇 14 篇 1 節)「愚かな者は戯れ事に罪を犯しその希望は絶える」(箴言 10 章 23 節)などのみ言葉もあるのだ。

1月31日 今日の通読箇所 ヨブ記 29章1～20  
「清福」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOBUE291.mp3>

「清貧」と言う言葉は割合に人に知られている。同じように「清福」つまり、りっぱで清潔な幸福というものもある。ここでヨブは、神の試みに会う前の幸福だった日々のことを懐かしく思い起している。あの幸福な生涯の秘訣は[3 節]にあるように「神のともしびがヨブの頭の上に輝き、その光によってヨブが歩んでいた」からだった。いま暫くヨブは、神の試みの苦難に耐えなければならない。しかしそれは長いことではなく、ヨブにはふたたび以前に勝る「清福」の日を迎えるのだ。